

自然農法と自然食品

来 米 速 水

(一) 近代科学特に近代農法の功罪

発達した近代科学（文明）は自然を人間にとって都合のよい形態につくりかえ、自然環境を支配しようとしてきた。

しかし、自然はその中に他の生物と共存している人間が、自由意志で操作すべき対象ではない。

むしろ自然はその中であらゆる生物が共存する循環系の秩序をしっかり維持している。

したがって、近代科学は生態的な自然の循環を破壊しているのである。これに対して近代科学はむしろ自然を研究対象としているという反論が提出されるかも知れない。しかし、その場合の自然は、科学者が実験的に限定し、囲いこんだ自然であって、本来の自然とはその性格を異にするものである。そして近代科学はこの囲いこまれた、人工的な自然を根拠に、それを都合よく分割して、科学的分析をすすめてきた。このような科学的分析方法は部分的で不完全なものである。科学の在るべき姿は本来の自然と人間との共生をはかるべきものである。しかし、近代科学が不完全かつ部分的であるといっても、現実には我々を取り巻く外部環境は巨大科学の支配の下につくり出された人工的世界である。したがって、この巨大科学を批判し正当な姿に戻すことは至難なわざと云わざるを得ない。その際、批判の方法は2つある。1つは近代科学の専門的な知識を活用してその矛盾を摘発することである。（反公害や反原発運動などはこの例である。）もう1つは現代の物質文明（科学）とは全く別の角度、例えば精神科学や宗教的視点等から批判する方法である。

工業に対する近代科学の適用はまだよい方であるが、近代農法（業）では大きな矛盾が露出している。すなわち、近代農法は化学化、機械化という言葉で表わされるように、大量の化学肥料や農薬等によって作物や家畜の生命がコントロールされている。換言すれば、近代農業は工業化された農業であって、それは本来の「生」を抑圧し、エネルギーを浪費し、環境を破壊し、食生活を大変不健全なものに変えている。つまり、本来は「有機的生命体の生産」であるべき農業が、無機物の生産を目ざす工業と同一の原理に基づいて発展させられたためである。

その結果、近代農法の発展は生産力を飛躍的に高めたと云うラメリットが認められる反面、農村生活及び農業生産環境の悪化と食生活の劣悪化というデメリットをも、同時にもたらしている。そこで「近代農法」の矛盾を止場し、正しい科学に基づく新しい農

法の登場が期待されるのである。それは生物の生命法則を重視し、自然の生態系に沿って営まれる農法でなければならない。これを仮に「生態学的農法」と名付けるとすれば、その中にはいわゆる「有機農法」や「自然農法」等が含まれる。これらの農法を実践している先進的な農家は単なる営利追求ではなく、生活の視点、つまり、健康な生活保持を主目的として農業を営んでいる。

そこで目を世界に転じて各国の動向をみると、Natural Farming（自然農法）とOrganic Farming（有機農法）とはほぼ同一の生態系農法の概念で理解されている。

我国でも同様の傾向がみられるが、歴史的経過の中で両者は一応区別されている。両者の実質的差異は家畜糞尿つまり、厩肥使用の是非にかかっている。その程度の差異によって両者は厳然と区別すべきかどうかは大いに議論の分かれる所である。というのは厩肥といっても、ワラや落葉などと混合して完全に腐熟させると良質の堆肥になるのであるから、両者が相対立する根拠は理念的なものである。この問題については、IFOAM（国際有機農法運動連盟）の規約や実際の活動ぶりを検討する必要がある。それによれば、両者共、生態系農業（法）としてその中に包含されている。

ところで自然農法や有機農法という新しい生産様式は通常の経済成長のように自然に発展しうるものではない。すなわち、近代農法とは質的に異なる生産様式であるため、国又は地方自治体等の大変な努力によって始めて発展しうるものである。これは資本主義でも社会主義でも全く同様である(拙著「世界の自然農法」1984年2月刊行予定を参照)。

（二）自然農法論

世界救世教の教祖である岡田茂吉師は最初に自分が始めた自然農法について次のように述べている。

「科学は他の物に対しては結構に違いないが、少なくとも農業に関する限り、無力処か大いに誤っている。例えば土の本質も肥料の性能も今以て不明であるため、人為的方法を可とし、自然の力を無視している。…中略…科学はとんでもない見当違いをした。それが自然力よりも人為力に頼りすぎた誤りである。…中略…本来科学を支配すべき人間が科学に支配されるようになったのは今日見る通りである」。これは科学に対する痛烈な批判である。しかし自然農法は原始状態に帰るというのではなく、岡田師は観察と実験に力を入れ、その結果を尊重して、自然力を第一義的に考える自然農法を提唱したのである。その経過を示すと次の通りである。まず昭和14年に無肥料栽培（自然堆肥は活用するが他の一切の肥料を使わない農法）を野菜について実施し、好結果を得ている。つづいて同17年から無肥料の水稲栽培に着手し、さらに小麦、大豆、花卉、果樹等の作物について

も、数年間に亘って新しい農法による実験と研究が続けている。勿論、全作物に亘る実験が行なわれた訳ではなく、又畜産等については全く未着手の状態である。しかし、上述の実験から新農法の名称は「自然農法」に統一された。（昭和25年10月）

そして全28年12月には「自然農法普及会」が結成され、普及活動が開始されている。岡田師は肥料について次のように説明している。「害虫なるものは肥料から発生するのであって、近來害虫の種類が増えたというのも、全く肥料の種類が増えたからである。…中略…肥料を吸収すると作物は非常に弱くなる。…中略…化学肥料のその殆んどは毒劇薬であるから、それを作物が吸収する以上、たとえ微小でも常住胃を通じて人体内に入る以上、健康に害なしとは云われない。…中略…堆肥の効果は土を固めない為と、土を温める為と、今1つは作物の根際に土乾きをさせない為である。」このように堆肥は専ら土を大切にするためであり、換言すれば何億と云う土中微生物の循環的働きを保護し、土を肥やすためであった。そして人糞尿は勿論、家畜の糞尿等は反自然物であって、その施用は土を汚すことになり、作物を通して人体に異物を持ちこむことになるから好ましくないと云うのである。

以上が自然農法の骨子であるが、これに対して全国農協中央会の一楽照雄氏は昭和46年に「有機農法」を提唱し、無機物に重点をおく近代農法を否定している。

Ⅲ 制度化された科学の強さ

多くの欠点を持ち乍ら、近代農法が依然として強大な力を維持している理由について考えてみよう。

近代科学は「全体」としての社会を設計し、建設すると云う方向ではなく、部分的改良の積み重ねによって社会を改良するという、いわゆる「漸次的工学」に脱皮しているといわれている。このようにしてつくられた工業的社会は強大な力を保持している。すなわち潤沢な公的科学研究費の交付は、その見返りとして、科学の体制（工業化された社会の維持と改良）の維持と奉仕を要求するのである。近代科学のスタイルは云うまでもなく、第1にその「教科書化」と「数量化」である。第2は人々を「訓練」することにより、科学者の大量養成、つまり科学の「大衆化」がすすめられる。第3は大量の科学者が雇用されること、つまり科学の職業化がすすめられる。以上が体制化を推進するスタイルである。ふり返ってみると1980年代には「反科学」が大きな高まりを示し、その運動が激化した。しかし科学が「制度化」し、「体制化」している今日、いずれの分野においても、体制保持の機能を持つ無数の巨大な職業集団が構成されている。アンドレスキーの表言を借りると「犬は犬を食わない」の譬えどおり、集団の構成員はおたがい

を庇いあい、外部の体制批判者には白い眼を向け、内部告発者を集団から追い出すのである。このような「自己保存機能」を各科学者集団は夫々具備しているといわれている。したがって既存のパラダイム（Paradigm）に難くせをつけるのはやさしいが、巨大な職業集団が大挙して移れるような確固たる新しいパラダイムを提案するのは大変至難な業である。そのため、既成科学に対する単なる「批判」は現存する科学の世界にさしたる変化や波紋を起すこともなく今日に至っている。そこで新しい流れをつくるためには、広範囲に亘る現代文明と科学に対する強力な批判と運動を組織する必要がある。しかも近代科学は末期的症状にあって、次のような欠点が顕在化しているとみられている。すなわち、①専門用語の乱用による科学の呪術化 ②研究能力よりも研究費獲得能力による学者の評価 ③研究費目当ての近視眼的研究の横行 ④学者の教養の欠如と劣悪な文章力等である。すなわち、全体的眺望の喪失が目立っているのである。しかし、だからといって体制は強固であって自然農法のような新しい流れは常に激しい抵抗を受けるものである。体制維持は支配者だけの問題ではない。例えば化学肥料や農薬の多用と機械化によって、農業生産力が高まり、農家所得が潤沢になった農民は近代農法の強力な支持者であるといえよう。その結果、日本農業の工業化と農村の都市化とその崩壊が進んだのである（拙著「日本の自然農法」参照）。

自然農法によって生産される食物は自然食品として販売される。健康食品又は安全食品などと呼ばれるものも見受けられる。そこで問題になるのは自然食品でも加工過程で合成化学の食品添加物を入れると自然加工食品ではなくなるのである。化学物質は人体にとってあく迄も異物である。最近厚生省や農水省が科学的にまず安全だと認めている食品添加物についても消費者の拒否反応が強まっている。人間本来の感性に基づいて食物を選択する消費者の態度は科学的思考よりももっと大切だと安達生恒氏が述べている。換言すれば科学の名の下で人間的感性を麻痺させることがむしろ重大なのである。食物を消費する側に人間的感性の麻痺がみられ、みだ目のきれいさだけが追求される傾向は是正されねばならない。しかし、食物を生産し、加工し、流通する側の人達も利潤の追求を第一義に考えないで、自然の生態系に則った健康にして且つ安全な食品を社会に供給せねばならない。